

---

# 約束

hirokatsu\_k

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束

### 【Nコード】

N1590J

### 【作者名】

hirokatsuk

### 【あらすじ】

月が出ていた。魅入るような真ん丸い綺麗な月が、僕のいる地上を見下ろしていた。あの月に向かえば、きっと遭える。

きっと、いつかきっと、僕が君を迎えに行くから。

僕と僕の約束。二人の約束。

月が出ていた。魅入るような真ん丸い綺麗な月が、僕のいる地上を見下ろしていた。

僕が産まれた日に、お母さんは亡くなった。お母さんは僕が目を開けた顔を見て、

ゆっくりと息を引き取った。

でも、その時の事を僕は覚えていない。

お母さんが暮らしていた家にはタケル君とその両親が住んでいた。

お母さんの代わりに三人は僕を育ててくれた。

特にタケル君は、僕の傍に居てくれた。傍に居て、色々な話をしてくれた。

お母さんの話、僕が産まれた時の話、タケル君の事、タケル君の両親の事。

産まれた時にお母さんが傍に居なかった事は凄く寂しかったけど、それ以上に

タケル君が僕に愛情を注いでくれた。

ある夜、タケル君は僕を庭に呼んだ。そして空を指差し僕にこう言った。

僕は宇宙飛行士になって、あの月に行くんだ。

タケル君が指差した空には、真ん丸い綺麗な月が出ていた。

それから僕はタケル君とたくさん時間を一緒に過ごした。

一緒に走り回ったり、川で泳いだり、

遊んで欲しくて、タケル君の勉強の邪魔して怒られたり・・・。

色々な思い出を作りながら、僕達の時間は流れていった。

でも・・・。

桃色の花が咲いていたある日、タケル君が悲しそうな顔で僕のところに来た。

そして小さく、悲しい声で僕に言った。

ごめんね、新しい家では君を飼えないんだ。

だからお別れをしなくちゃならないんだ。本当にごめんね。

僕を抱きしめて泣いているタケル君の後ろに、知らないおばあさんが立っていた。

嫌だ、行かないで。もっと一緒に居させて。

僕はタケル君の背中に向かって一生懸命叫んだ。

けれど、タケル君はその声を振り切るように僕から離れていった。

僕が連れて行かれた家で、僕は鎖に繋がれた。

新しい家での生活は決してひどいものでは無かったけれど、それでもタケル君が居ない生活は、僕には耐えられないものだった。

タケル君に逢いたい……。

そう思って前に踏み出しても、僕を繋いだ鎖はそれ以上前に進む事を

許してくれなかった。

それでも僕は、何日も何日も、前に踏み出そうとした。

桃色の花が散った日、その夜の風はとても強かった。

その日僕が前に踏み出そうとした時、僕を繋いでいた鎖は強い風に千切られて、僕の歩みを止めれなかった。

僕は走り出した。

あの月の下へ向かって。

タケル君はあの月へ行くって言った。

あの月の下へ行けば、タケル君に逢える。

月が消えて、またその月が出たら、またその月に向かった。  
何度も何度も繰り返し返して、僕は走った。

そして真ん丸い綺麗な月の夜、僕は狭い道の端で意識を失った。

懐かしい声、懐かしい匂い、  
目を覚ました僕の前に、タケル君が居た。

タケル君は僕が目を覚ましたのに気付くと、僕を強く抱きしめてくれた。

その後、僕はタケル君にすごく怒られた。

僕が居なくなつたと聞いて、タケル君は一生懸命捜してくれていた。

その夜、僕は久しぶりにタケル君と一緒に眠った。

次の日、おばあさんが僕を迎えに来た。  
タケル君とまた、お別れなんだ。

そう思っていたら、タケル君は僕にこう言った。

きつと、いつかきつと、僕が君を迎えに行くから。  
僕と僕の約束。二人の約束。だから、待っててね。

それから、桃色の花は何度も咲いて、何度も散った。  
その間に、色々な事があった。

おばあさんが亡くなって、おばあさんの家におばあさんの子供が  
暮らし

始めた。

僕も昔みたいに走れなくなった。歩く事も精一杯になった。  
一日のほとんどを、寝ている事が多くなった。

桃色の花が散った日、その夜は風がとても強かった。

その風に乗って、とても懐かしい匂いがした。

誰かが僕の前に立っている。

遅くなってごめんね。やっと迎えに来れたよ。

二人の約束、やっと、やっと果たせるんだ。

懐かしい声、懐かしい匂い、

お母さん、タケル君は僕との約束を守ってくれたよ。

僕はタケル君の顔を見て、

ゆっくりと

息を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1590j/>

---

約束

2011年1月26日05時08分発行